



魂

魄  
妖  
夢

鬼

退  
治



第一版



【一】

常冬の地底には、今日も変わらず雪が舞う。

辺りに籠る澱んだ土の匂いは、地の下に積もり積もった怨響がもたらしたものだ。見上げた頭上に空はなく、ただ苦むした岩肌が天を塞いでいる。

ここは地の底。忘却の旧都。

忌み嫌われ、地上より追い遣られた妖怪達が住まう、かつての地獄街道、その終端。宿場の繁華街からも遠く離れ、廃屋だけが立ち並ぶ寂れた一角に、ぼつぼつと鬼火が灯つてゆく。

雪舞う中に青白く燃える炎は、朽ちかけた街並みの中にふたつの影を浮かび上がらせていた。

片や、朽ちた巨木の根元にどつかと腰を下ろし、大きな朱杯を掲げた一角巨軀の鬼。

片や、腰と背に大小の二刀を帯び、ひと抱えほどの幽霊を隣に漂わせた、小柄な半人半霊の少女。

「なあ。どうだい、たまにや刃物は仕舞って一杯付き合わないかい？ こつちは年中地面の下だから、肴なんて雪くらいしか

ないがね」

朱塗りの大杯をぐいと干し、星熊勇儀はにいと牙を覗かせる。肌蹴た羽織の下に手を入れて、まるで緊張感のない姿だ。

が、対峙する少女は些かも気を緩めることはなかった。

「……いえ、申し訳ありませんが、遠慮します」

静かに告げ、白玉楼の庭師、魂魄妖夢は静かに楼観剣を抜き放った。鞘を腰に納め、刃渡り四尺三寸の太太刀を澱みなくひたりと正眼に構え、真つ直ぐに勇儀に相對する。

一見、まだ幼く手足も伸び足りない少女の体軀は、しかし正確に宙に刃先を定め、その切っ先を僅かなりともぶれさせることはなかった。

すらりと伸びた反りの浅い刀身の峰に、降り積む雪の結晶が触れてはすうと溶けてゆく。

「そうかい。残念だねえ」

それでもなお、勇儀は動きを見せずにいた。立て膝のまま、背後にもたれかかる酒樽から、ざばりと大杯に酒を掬いあげ、ぐい、と一息にそれを呷る。

およそ、妖夢の知る鬼というものは、暇さえ有れば酔っ払っている底なしの酒好きであったが——地底の鬼もこれまた、負けず劣らずの酒豪であるらしい。

一つ、違ふとすれば。

「どうしたい、来ないのかい？」

星熊勇儀はそれに輪をかけて、こうした力比べを好むということ。

「——参ります」

片目をつぶり、牙を覗かせての挑発の言葉に、妖夢は静かに身を沈め、地を蹴った。

小さな体躯の中に、引き絞り蓄えられていた力を解き放つ。

踏み出す脚はわずか三步で疾駆となり、妖夢は放たれた一条の矢のごとく勇儀の元へ駆け翔んでゆく。

迎え撃つ勇儀は、立て膝のまま身を起こし、振り被った腕を力任せに薙ぎ払った。さして力を籠めたとも見えない腕の一振りには、鬼の桁外れな臂力を示すかのように、大地を深々と抉り剥がす。

こう、と月をも砕く剛腕が迫る中、妖夢はさらに深く踏み込み速度を上げた。真横に打ち振るわれる勇儀の爪の下を、低い姿勢でぐぐり抜ける。

同時、なみなみと酒を湛えていた酒樽が真二つに裂け、半ばほどまで切り裂かれた紅の大杯が、酒を零しながら宙に舞った。一閃十滅の楼観剣が白刃を煌かせて翻り、勇儀の喉元へと跳ね上がる。

「あつはつはつは!! いいねえ、そうでなくちゃあ困る!!」

巨木の下より跳ね起きた勇儀は、宙に身を躍らせると同時、真下から搦り上げるようにもう一方の爪を振るっていた。どん、

と空気が真二つに引き裂かれ、塵墟をびりびりと震わせる。

地を割り砕く五本の爪が、白く水蒸気を棚引かせて妖夢の頭をかち割らんとする。

頭蓋を真下から狙う勇儀の剛腕を前に、妖夢はさらに深く脚を踏み出し、腰を落としていた。

地面に腹這いに伏せるような、超低空の姿勢。一段と低くなった少女の頭上を、鬼の臂力がわずかにかすめた。髪留めが千切れ、風圧に揺れる銀髪がはらりと揺れ、爪の先が頬を擦る。

「そこだっ!!」

大地を支えに紙一重で鬼の一撃を躲し、妖夢は勇儀の懐へ飛び込んでいた。握る一刃を深く突き出すと同時に、鈍い手応えが庭師の腕を震わせる。

だが、次の叫びは鬼ではなく少女のもの。

「っ!?」

勇儀の右腿を狙って斬り付けた楼観剣の切っ先は、あろうことか、鬼の掌でがつきと掴み取られていた。

およそ剣術には在り得ない手筋に、驚愕する暇もなく、妖夢の腕にがちゃん、と勇儀の嵌める手枷が絡みつく。金の軋る音が響き、庭師の身体はそのまま宙を舞った。

「はつはア!!」

哄笑と共に、勇儀は苦輪の鎖に繋がれた妖夢の身体を振り回した。まるで頭陀袋のように妖夢の身体は宙を踊り、地面へ

と容赦なく叩き付けられる。

「——ぐあ、っ!!」

剥き出しの岩盤に背中を打ち付け、息を詰まらせた妖夢の腹に、勇儀の爪が撃ち込まれた。

咄嗟に跳ね上げた鞆の上から馬鹿力でぶん殴られ、妖夢は地下の都の街の外れまで、水平に地面を跳ね飛ばされてゆく。

庭師の小さな身体は二つばかり倒壊寸前の廃屋を貫いて、瓦礫に激突し、なおも高く跳ね転がる。

痛みを堪え、ようやく受け身を取って起きあがれば、

「いくよ」

そこには既に、拳を固めた勇儀の姿。

構えをとるよりも早く、妖夢の鳩尾に、ぎりりと握り込まれた鬼の拳が撃ち込まれる。

「ごん、と腹に大穴を開けるような衝撃。勇儀の拳は深々と少女の腹にめり込んで、刹那に肋をへし折って脊髄までを貫き、妖夢の意識を刈り取った。



気を失っていたのは数瞬のことであつたらしい。自分を受け

とめて倒壊した瓦礫の中から這い出した妖夢は、喉奥に込み上げてくる血と鉄の味に思い切り顔をしかめ、咳き込む。

覚束ない手足に活を入れ、刀を杖に身を起こす。

その前にはすでに勇儀の姿があり、いささか呆れた風に表情を緩めていた。

「——あたしも大概、人のことは言えやしないが、頑丈だねえ」「鍛えていますので」

妖夢はそう虚勢を張って立ち上がった。

脳髓の揺れを堪え、頬の血を拭って、額に力を込めてぼやける視界の中に勇儀の巨軀を見据える。

半人半霊という種ゆえ、痛みにはそれなりに耐性があつた。

つまりは、痛みを感じる人の身体は半分程度しかない、という意味で。

それでもなお、受けた傷は決して少なくない。ふわりと隣に浮かぶ半身にそつと背中を預け、妖夢はゆつくりと楼観剣を構えなおす。

「で、今日はこのへんでお仕舞いにしとくかい？」

ぺろりと手指についた酒の雫を舂めとり、勇儀は言う。先程の攻防などまるで意に介さない態度だつた。彼女にとつてはこの程度の受け攻めなど精々じゃれ合いのようなもので、酒を台無しにされた程度のことではしかないのかもしれない。

息を荒げる妖夢と、余裕の勇儀。さし向かう二人に対峙とい

う構図はなく、さながら満身創痍の乙女を嘲りいたぶる地の底の悪鬼の体である。

事実、まるで無傷の勇儀に対し、妖夢には頬に血をこぼす深い裂傷をはじめ、手足にも数え切れぬほどの擦過傷、打撲傷が見て取れる。

傍らを浮かぶ半霊までも、心なしかその色合いを薄くしているようだった。

だが。

「いえ、まだ、やれますっ」

こもも明白な実力差を前に、妖夢の心は、いまだ、些かも揺らいでなどいなかった。

よるめく足を踏みしめ、荒れていた呼吸を一息で丹田の底へと押し込み、余った呼吸を一気に吐き出す。

大きな吐息が旧都の街並みに白い靄をつくる中、妖夢はぼちんと大太刀を鞘へと納めた。

その、刹那。

「——人符『現世斬』」

静かに、その声は——剣閃の後から飛んできた。

ほんのわずか、妖夢の身体が前に沈み込んだと見えた瞬間。

庭師の姿は勇儀の遙か背後へと駆け抜けており、楼観剣は静かな鏗鳴りだけを響かせて、再び鞘へとおさまっている。

斬撃の余波が、一拍遅れて旧都の街並みに閃光を刻む。

抜く手も見せぬ居合い一閃。二百由旬の庭を駆け抜け鍛えた脚力が可能にする、半人半霊の庭師最速の剣。

神速の一閃は、狙い違わず勇儀の脇腹から胸にかけて深々と斬り込んでいた。

が——

「ぐ……!?!」

眉を寄せ、わずかな苦悶を上げたのは、斬られた勇儀ではなく、斬ったはずの妖夢のほう。

およそ斬撃の手応えとはかけ離れた、鉄棒で大岩を殴りつけたとき衝撃だった。痙攣する手指で辛うじて刀を取り落とすことだけは避け、妖夢は奥歯に苦い鉄の味を噛み締める。

「今のがとっておきかい？ ま、確かに速い。

……けど、それだけだ」

残心を取る妖夢の前で、勇儀はばんばんと脇腹を叩いてみせる。まともに楼観剣に切り込まれたはずの、裂けた羽織の下から覗く鬼の肌は、傷一つなく綺麗なものだ。

鐵、あるいは緋金。そう呼ばれる鬼の肌は、鋼よりもなお硬いという。が——この鬼の桁外れの頑強さは、岩を、鉄を斬ることのできる妖夢をして、いまだ触れたことのない頑強さを誇っていた。

妖夢が動揺を表に出していたのはほんのわずかな時間であつたらうが、それを黙って見逃す勇儀ではない。笑みを見せなが

らがつきと牙を噛み合わせ、虚空をつかむように手を広げた。渾身の力をそこに握り込むように、みりりと骨を軋ませ拳をつくると、振りかぶった一撃を打ち放つ。

地底の天蓋すらも揺るがす爆音が、轟く。

「——鬼符『怪力乱神』」

符名の宣言こそあつたものの、そも、それは技とも呼べるものだろうか。語られる怪力乱神——星熊勇儀にとつてはその一撃一撃すべてが、まさしく必殺なのだ。

重ねを重ねて描く弾幕の群れと共に、立ち並ぶ廃屋が根こそぎ吹き飛ばす。視界を埋める弾幕の中、爆音を伴い、雪崩をうつつ押し寄せる瓦礫の前に、妖夢の反応がわずか、遅れた。

刹那。

「——ッ」

恐ろしく早く鋭い蹴爪が、ざくりと妖夢の額を抉る。咄嗟に身体を仰け反らせた妖夢の顎先を、勇儀の蹴足がかすめていた。あと一瞬、反応が遅れていれば頭が案山子のようにもぎ落とされていただろう。勇儀は切り札にもなるであろう高威力、殲滅型の広域破壊スベルカードを、無造作に四にして妖夢との間合いを詰めていたのだ。

底知れぬ鬼の怪力に、ぞくりと、少女の背筋を悪寒が走る。その恐れが、庭師の動きを硬くした。

あ、と思った瞬間には、土埃を裂いてぬうと突き出した鬼の

手が、妖夢の頭をみしりと掴んでいた。

繰り出された丸太のような膝が、鼻先に炸裂。鉄と炎の味が、少女の喉奥に散る。

「ッあ……ッ」

口中に血の味がこみ上げ、遠のく意識の中、妖夢はじやらん」と軋む鎖の音を聞く。

激痛に、胃の腑に氷のような怖気が流れ込む。

「……まだ、ッ」

薄れる意識を懸命に繋ぎとめ、妖夢は鬼の拘束を脱し、身を翻す。

今度は大きく距離を取ることとはしない。勇儀の左へ踏み込むと共に、前を——迎撃のため大きく爪を拳を振り上げた鬼へと両の眼を見開いた。

額から流れる血に、紅く霞む視界の中、心の中に芽生えかけた畏怖の心をねじ伏せて、さらに前へと、深く踏み込む。

(……疾さを選べば威力に欠ける。鬼相手には通じない)

胸中で確認するように、息吹を吸い込み、楼観剣を正眼に構え、脇を締めて柄尻に小指を絡める。

爪先から頭の先まで、全身を巡らせて練り上げた剣気を四尺余寸の大太刀へと澱みなく注ぎ込み、

「——なら、これだ!!」

吐き溜めた息吹と共に、妖夢は大上段に振りかぶった太刀を、

大鉦のように斬り下ろす。

——断迷劍『迷津慈航斬』。

それは、魂魄妖夢の劍において、まさに必殺最強の一撃。

その名の如く一切の迷いを断ち、真つ向斬り捨てる、小細工も打算も無視した、馬鹿正直な太刀筋だ。

だが、そうして単純明快であるがゆえに、その劍はもつともよく妖夢の性根を躪あはした技でもあった。

ゆえに、その一太刀に斬れぬものは、殆どない。

ず、がんツツ!!

「地底を揺るがす爆音を響かせて——

渾身の一太刀が振り下ろされる。

「……そんな」

妖夢の驚愕は、果たしてこの日何度目であつたらうか。

そこにあつたのは、一刀をその身に受けた鬼の屍——ではなく。にいと口元を緩めた、勇儀の姿。

「成る程、ねえ」

鋼鉄の手枷がじやらりと鎖を鳴らす。

勇儀はまたも、その巨きな掌で必殺の切っ尖を受けとめてい

た。四尺三寸の刃先を、鬼の指がみりりと掴みあげる。

ありつたけを籠めた一撃すらも捌かれたことに、妖夢は動揺を隠せなかった。

なぜ、と叫んでこそいなかったが、その問いは表情に出ていたのだから。勇儀は楽しそうに、空いた手の親指でとんと自分の胸を示し、笑う。

「鬼が力比べで負けちゃ、格好がつかないだろう?」

妖夢はその時、楼観劍の柄を離せずにはいた。

師が遺したこの刀は、彼女にとつて命と同等に大切な、自分と不可分の存在だった。楼観、白樓の双劍と共に己の技を磨く事を誓った日から、この二振りには妖夢にとつて唯一無二の愛刀なのである。

楼観劍を失うことを恐れ、手離す事を一瞬躊躇ためらったことは、悪手とは言え決して責められるものではない。

そしてまた、勇儀が敢えてそのような防禦を選んだのは、妖夢を逃がさぬためでもあった。

「さて、そんなじゃこつちも見せてやらなきやね」

そう言い、鬼が一步を踏み出したと同時に、ずずん、と地殻が揺れた。

旧都の一角には勇儀を中心に同心円状に亀裂が走り、地面が陥没して深々と大穴を穿つ。

まさに、灼熱地獄の底を踏み抜かんばかり。比喻抜きで地底

を揺るがすほどの一步を、星熊勇儀はその地に刻んだ。

「一撃必殺つてのは、こうやるのさ」

思わず見上げる妖夢の眼前、まるで天を衝くばかりに巨大に、迫る鬼の姿があつた。

割れた大地から噴き上がる溶岩の上、額の一角を振りかざし、みしりと肉を軋ませ骨をたわませ、固めた拳が高々と振りかぶられる。

「——っ!？」

慌てて白楼剣を抜き放ち、構えを立て直す妖夢だが——

「遅い」

二歩めの踏み出しが、妖夢の目前へと迫り、

あ、と声を上げる暇もなく、じやらりと手枷に残る短い鎖を鳴らして、勇儀の巨きな手爪が視界を埋め——

ずん、と三歩めの踏み込みと共に、

妖夢の意識は、そこで闇に落ちた。

【一】

微かな水音に眼を覚ませば、背中は板の上でぎしぎしと軋みを上げている。

全身が鉛を流し込まれたように重く、鈍い痛みを訴えていた。全人零霊のただの人間よりは痛みには強いほうだが、それでもやはり痛いものは痛い。

「う……」

こみ上げる咳に数度身体を丸め、固まりかけた血の混じった唾を吐いて、妖夢はようやくその場に身を起こす。

もはや見慣れてしまった旧都への入り口となる大きな橋。そのたもとに、いつものように妖夢の身体は投げ出されていた。

地底をとうとうと流れる河は、変わらず静かな水面を薄闇の中に覗かせている。

「……ぐっ……」

鬱血した打撲に、痣の痕。痛む四肢が熱を持ち、脈動するようにはずきんずきんと腫れ上がる。手足のあちこちで新しい傷が服の布地に張り付き、ばりばりと不快な音を立てる。

欄干に背中を預けて痛む身体を休め、少しずつ呼吸を整える。全身をまさぐって傷をあらため、骨折や特に酷い怪我がないとを確認すると、妖夢は這うようにして河原に降りた。

流れる河面に、まだ腫れの引いていない顔が映る。

「……酷い様だ」

傷口に染みるのを我慢しながら、妖夢はぎぶぎぶと河に踏み入って、血と汚れを落とし、手当てを始めた。

脇あばらは兎も角、手脚の骨や腱は無事で、まったく動けないわけではない。が、満身創痍なのは間違いない。数日は治療に専念せねばならないだろう。傷を洗い、包帯を巻き、特に怪我の酷い部位には荷物の中から膏薬を取り出して貼り付けてゆく。

（一人で包帯を巻くのが、だいぶ上達したな……）

なんとも締まらない話に、思わず苦笑が漏れる。

「ふう……」

手当てを終え、一息をついて。最後に土埃と汗に塗れた顔を洗い、手拭いを額に押し当てる。ひんやりとした冷たい水が頬に心地よい。

続いて妖夢は腰から外した二振り、楼観剣、白楼剣の点検を始めた。もともと妖怪を斬る為に鍛えられた刀、容易く痛むものではないが、それでもあらためるに越したことはない。

目釘がいくらか脆くなっていたのを取り替え、打粉うちこなを拭いて、丁子油ちようじあぶらを引いて、さらさらと流れゆく河面を眺めていると、

ようやく余裕の出来た心に先刻の手筋が蘇ってくる。

「うーん、あれでも敵わないか……」

ぱちんと双剣を鞘に納め、改めて腕組みをして妖夢は唸った。

妖怪の山の四天王、怪力無双の「力の」勇儀。

鬼がとにかく強い生き物だとは解っていたつもりだが、ああいった形で格の違いを見せつけられると、考えを改めざるを得なかった。

彼我の実力差も、あそこまではつきりと思いきらされると、悔恨よりも感心が先にあった。

痛む肋骨に顔をしかめつつも、石の転がる河縁から、橋のたもとに引かれた<sup>モト</sup>莫塵の上へと腰を下ろす。

そこには、暦代わりに日付を刻んでいる岩があった。既に二十を超えた傷の下に、今日の分を刻みつけ、妖夢は嘆息する。

「参ったな。あんまり長居もできない……はずだったんだけど」

「……また負けたのね」

頭上からの声にふと妖夢が振り仰げば、いつのまにか、橋の欄干に寄りかかる影が一つ。

常冬の旧都の橋守る、嫉妬を操る橋姫。水橋パルスイ。深く限の浮く、病んだ目元をさらに陰鬱にしかめた彼女は、ひたすらに不機嫌に口元を歪めたまま妖夢を見下ろしていた。

「……パルスイさん」

「もう阿保らしくて妬む気にもなれないわ」

包帯だらけの妖夢に視線を移し、パルスイは見せ付けるように大きく溜息。

「ねえ、これで何度目？」

「……十八度目、です」

「いいかげん諦めたら？」

「そういう訳にもいかないんです。事情がありまして」

勇儀との果たし合いは、これまでの十戦すべてが妖夢の敗北という結果に終わっている。地底の妖怪達の賭けの対象は、すでに勝負の行方から、妖夢の黒星がどこまで増えるかに移っていた。

勝ち星どころか一矢報いることすら果たせていない現状に、妖夢は参ったものだ自嘲する。

妖夢は現在、この橋のたもとに間借りをしている。

これまでも数度、勇儀からは旧都の宿への滞在を勧められていたが、鬼退治に來た自分がそれでは格好がつかないと、妖夢はそれを断り続けていた。ならばと紹介されたのがこの旧都の大橋であり、パルスイのだが——何故か嫉妬の橋姫の視線は日に日に険しくなるばかりだ。

「……馬鹿馬鹿しいくらいに糞真面目ね」

「それしか取り得がありませんから」

「馬鹿にしてるのよ？」

解ってるの？ とばかりに半眼で言ってくるパルスイ。妖夢

の鍛錬を目がな一日こうして彼女が眺めているのも、ここしばらくの日常になつていた。

橋上で呆れた顔をする橋姫は、しかし憎まれ口を叩きながらも、あれこれと妖夢の世話を焼いてくれていた。余所者の自分が妖怪ばかりの旧都に馴染めているのも、彼女の計らいによるものである。不思議に思つた妖夢が理由を聞いてみても、帰ってくるのは実に不機嫌な表情と、

『……貴方、私がここから離れられないのが解つてて言つてるの？ ねえ。そう言つてるのよね？』

という昔立ち混じりの言葉。そのくせ、妖夢が橋を出て行くとするれば、パルスイはますます不機嫌になつてそれを引きとめるのだ。

(……どういう心境なんだろう?)

その態度の理由が、妖夢にはまいちピンとこない。

「……ああ、もうっ」

パルスイは「しし」とこめかみを擦りながら毒づく、欄干を飛び降りた。そのまま無造作に河原を歩いて、座り込んだままの妖夢へと歩み寄ると、真新しい膏藥の貼られた頬を、ちゃんと手のひらで叩く。

「うくっ……!？」

傷の痛みには妖夢が思わず呻きをあげれば、パルスイは見なさいとばかりに眉を振つて妖夢を睨んだ。

「いい加減気付きなさいよ。なんなのそのザマは」

「……これは私の未熟ゆえです。幸いにして、ひどい怪我もありませんし、何日かすれば——」

「当たり前よ。手加減されてるに決まつてるじゃない。今時、鬼退治なんて酔狂なこと言い出す人間、あいつが見逃すはずないじゃないの」

「はあ」

半分は幽霊ですけどね、と付け足した妖夢を、まるで無視して。パルスイは小さく首を振つた。

「鬼なんてロクなもんじゃないわ。周りの事は考えないし、こちの都合なんか考えずに好き放題だし。文句付けてやろうにもまともに話も通じない。あいつらはね、楽しいかそうでないかくらいしか感じないのよ」

「そんなことはないと思いますけど。いつも私の我儘に付き合つて頂いています」

「は。それが馬鹿馬鹿しいつてのよ。つくづくお目出度いわね、貴方つて。……いい？ 鬼が、人間を放つておく訳ないの。」

何度も諦めずに挑んでるつもりなんだろうけど、逆なのよ。あいつが飽きるまで勝負に付き合はされてるだけ。そのうち適当なところで負けてくれるわ。見事だ、人間にしては良くやるな。つて、上から目線のままね」

だから馬鹿なのよ、と。

殊更に憎まれ口を強めて、パルスイはぼつりと続ける。

「……嫌われたくないのよ、人間に。あんなに何度も何度も裏切られて、こんな地の底まで逃げておいて、それでも……本当、馬鹿みたい」

パルスイはまるで自分のことのように、辛そうな表情でそう口にして、妬ましいわ、と最後に付け加えた。

ちらりと横目で妖夢を睨むと、嫉妬の橋姫は再び橋の上へと戻り、くると踵を返す。

「……どんなに卑怯な手を使われても、裏切られても、それを受け止めてやるのが度量だなんて馬鹿なこと考えて、そうやって決めて一人で背負いこむのよ。だからいつでもかかって来いなんて言い出すんだわ。

……だから、貴方のやってる事は全部無駄。一人相撲もいところなの。わかつたらさっさと諦めなさい。」

反駁など聞く耳持たぬとばかり、パルスイは背を向けて橋の向こうへと去ってゆく。

「あ……」

妖夢は思わずその背中に手を伸ばしかけ——無駄なことか、と諦めて続く言葉を飲み込んだ。

実際、酔狂なことをしているなという自覚は、妖夢にもある。

なぜ自分がここに来ているかといえは、それは至極単純な理由で、しかも共感も得られないだろうことも確実な、いまさら説

明するのともうかと思われる程度のものである。

……それでもあえて語るのならば、その始まりはこんなふうだった。



冥界は白玉楼。輪廻を待つ死後の魂が訪れるこの地にも、頭界と変わらさず季節は巡る。長い階段を昇った先の庭で、日毎柔らかな土の下から、緩む寒さとともに若芽がその芽を膨らませている。

近づく春の足音を感じさせる穏やかな午後。縁側でお茶を傍にうつらうつらと目を細めるのは、白玉楼の主である西行寺幽々子。妖夢はそんな主人の様子を脇目に、二刀を手に庭の剪定をしていた。

その広さ二百由旬を誇る冥界の庭の管理は、西行寺家の剣術指南役とともに、妖夢が師から受け継いだ役目である。

「……………」

たった一人でこの広大な庭を世話するには、想像以上の体力を使う。これも鍛錬の一つなのだ。朝から晩までかかってまるで終わりの見えない庭を前に、妖夢はただひたすらに無心

となつて双剣を振るい、手早く伸びた庭木を刈り落としてゆく。

そんな時だった。

「……ねえ妖夢」

「はい？」

庭を駆けていた妖夢へ、ふわあ、と気の抜けた欠伸とともに、幽々子の声がかかる。

「その枝は残しておきなさいな」

「え」

ぴくりと、両の手に構えていた刀を止めて、妖夢は思わず身を竦ませた。けれどまさに今、深い考えもなしに切り落とそうとしていた枝のすれすれを、薄く楼観剣の刃が撫でる。

あ、と思つた時にはもう遅かった。一振りで幽霊十匹を斬る鋭い切っ先が、枝をほとんど抵抗もなく切り落とす

ざん、と地面に落ちた梢の前に、

「あらあら」

幽々子は相変わらず、どこを見ているのか分からないふわふわとした口調でそう言うのと、はむり、と美味しそうにお茶受けの雪見大福を口へと運んだ。

数秒の沈黙の後、妖夢は幽々子へと向き直り、頭を下げる。

「……も、申し訳ありませんっ」

「駄目ねえ、妖夢」

呆れたように吐息を挟み、幽々子のはのんびりとお茶を啜った。

「今日のお昼ご飯も、少し塩が濃かったかしら」

「……う。……すみませんでした。幽々子様」

立て続けに己の失態を指摘され、妖夢はますます小さくなるばかりだ。

亡霊らしくふわふわと、何も気にせず辺りを漂っている様でありながら、幽々子の言動はいつも真理を突いている。特に今日は妖夢自身、疎かになっている部分があることを自覚していたゆえ、その重さはなおさら際立っていた。

「本当、妖夢は何をやらせても半人前なのねえ」

「うぐっ」

痛いところを突かれ、思わず苦悶が漏れる。

半人半霊、という自分の出自にかけて、白玉楼の主がそう評するのは常日頃からのことだ。

これは不満ではなく、従者の不出来を問い詰めているわけでも、反省を促しているわけでもなかった。幽々子が言うのはいつも事実そのまま、だからどうしろ、ということと言外に含めることをしない。だからその言葉を受け取り、どうするかはあくまでも妖夢自身の判断になる。

そこを測り損ねると、空回りするのは自分だ。

春雪異変、三日置きの百鬼夜行、永夜異変、六十年周期の大結界の綻び、緋色の霧の異常気象。繰り返された騒動の中で、妖夢はそのことによりやく気付いていた。

「……修業中の身ゆえ、ご迷惑をおかけします」

「そうねえ。もっとしっかりとしてくれないと困るわ」

さして気にした風もなくそう言いながら、残る大福を口へと運び、幽々子はお茶を啜る。

自覚はしていても、やはり仕える主に面と向かってそう言われると、堪えるものはあつた。

師があれだけ鍛錬を積んでなお、自身を道半ばと言っていたのだから——その小指にも満たない自分の歳で、それを悔いても仕方のないことだ、とは思ふ。

思いはするが、それで今の不足が補えるわけではない。

(……………)

西行妖を巡る、春雪異変の後より、妖夢は深く、己の未熟を感じるようになっていた。

自分の力が及ばぬゆえ、自分の思慮が及ばぬゆえ。幽々子の重荷となっているのではないか。その迷いは、いくら鍛錬を重ね、日々の役目をこなし、異変に臨み、問答を繰り返しても、必ず妖夢の心のうちに残った。

幽々子はそれすらも楽しんでるぞぶりを見せていたが、それに甘えてはならないのだろうと、妖夢はそう考えている。

「そうだ！」

妖夢がひとり物思いに沈んでいると、突然、幽々子はばあつ、と顔を輝かせて立ち上がった。空色の袖をぼんと打ち合わせ、

無邪気な顔で妖夢を見やる。

「ねえ妖夢、いいことを思いついたわ」

「……何でしょうか？」

「妖夢に、早く一人前オトナになつてもらおうのよ」

「は、はあ……」

ウインクを伴う微妙に怪しげな言い回しに、返答がつい胡乱げなものになつてしまったのは、仕方のないことだろう。

こういう時、幽々子が言い出すのは大抵、脈絡もなく突拍子もないことだというのを、妖夢は経験上、嫌と言うほど思いつている。

「妖夢、鬼を斬つてきなさい！」

そして今回。ぱつと扇子を広げて幽々子の下した命もまた、やはり例に漏れずその通りだった。



地底に住む鬼のことは、妖夢も人伝に耳にしていた。

およそ、幻想郷一番の大妖にして神出鬼没のすさま妖怪を友人に持つ西行寺幽々子が、幻想郷についてのことでは把握していないということは少ない。

忌み嫌われた妖怪が逃げ込んだ地底、旧地獄に住むかつての山の四天王、星熊勇儀。幽々子は彼女をさして、妖夢の修練に丁度いい相手だと言つてのけたのである。

(鶴の一声、というのはいああいうのを言うんだらうなあ)

思い返しながらか、妖夢は静かに苦笑する。

——古来より、武士は怪異を斬つて名をあげる。

源頼光や渡辺綱、三位頼政もその通り、妖異を斬つてその勇名を轟かせ、知らぬものなき英傑となつた。

ちやうど都合よく相手までいるのだから、是非そうなさいそれがいいわと一人盛り上がる幽々子の言葉に従い、妖夢は地底に赴き——以来一月以上も、勇儀に挑み続けているのであつた。

その成果は、御世辞にも芳しいとは言えない。

鬼を斬る。冷静に考えればかなりの無理難題であつたはずのそれを、さして気にもせずすんなりと受け入れてしまつたのは、油断もあつたのだろう。

(……自惚れていたのかもしれない)

鬼、というものを見切つたつもりになつていたのは確かだ。

妖夢は幻想郷に名のあるもう一人の鬼、小さな百鬼夜行、伊吹萃香と、三日おきの宴会騒ぎで戦つた経験がある。しかし今にしてみればあの立ち会いは命名決闘法(スベルカドール)に基づく異変解決のためのもので、双方合意の儀礼のようなもの。本来の意味での闘いとは程遠いものだつた。

幽々子が命じたのはそれではなく、古来より鬼が好み人が挑んだ、鬼と人との力比べであつた。

しかも、かつての大江山の四天王、星熊勇儀は、妖夢の想像の埒外にある相手だつたのである。

「……誇られても仕方ないかもしれない」

元々は禁じられていた地底との交流だが、幸いにして、昨年の間欠泉の異変以来、規制緩和が始まつていた。

幽々子の推挙もあり、さして苦勞なく地底に赴いた妖夢は、まず初めに勇儀との面会のために彼女が逗留しているという旅館を訪れた。

恨み骨髄の敵討ちでもあるまいし、であればこちらから日時や場所を一方的に指定するわけにもいかない。まずはそれらを取り決めることが必要で、勝負を申し込む側が出向くのが筋だろうと考えたのだが——

「はつは、そんなもん、決めることなんかないだろう。お前さんが好きな時にかかつてきな。行住坐臥、いつだつて相手になつてやるよ」

旧都街道の宿場街を根城にする一角鬼は、酒盛りに賑わう座敷の一番奥に陣取つて、大杯片手にぶは、と酒気漂う息を吐いて豪気にそう言い放つた。

「いちいち真面目だねえ。融通が利かないつてえほうが近いかもしれないが。鬼退治に筋を通そうなんざ、雷公達(らいこう)に見せてや

りたいもんだ」

「からからと豪快に笑ったかと思うと、勇儀は口元に牙を覗かせて剣呑な笑みを浮かべる。

その豪放磊落な気性は、妖夢の眼にも好ましいものに映りしたが、妖夢とて夜駆け不意打ちなど不本意である。もとは勇名のためとはいえ、あくまで自分は腕試しに赴いたのだ。

「その、……お心遣いは嬉しいのですが、さすがにそう言う訳にも——」

騙し打ちのような真似はしたくない。そう言いかけた妖夢を、勇儀の双眸が強烈な殺気と共に打ちすえたのはその時だった。

凄まじい視線に射竦められ、身動きの取れなくなつた妖夢の頬から顎へ、つうと汗の雫が滴り落ちる。

「それともなにかい。あたしは、お前さんに正々堂々真つ向から、さあ今からお前を討つぞ斬るぞとお報せしてもらわにやならんほど、腑抜けて見えるのかい。

……いやあ、あたしも舐められたもんだねえ？」



(……我ながらなんと浅薄だ)

結局その日が、妖夢が勇儀に対して最初の一敗を刻んだ日となった。分をわきまえない己の振る舞いは今思い出しても赤面するほどで、妖夢は気恥ずかしさを覚えて俯く。

己が未熟であることは、常日頃自身に言い聞かせていることだというのに、このざままで鬼を討ち果たせると思い込んでいたのだから笑えもしない。

さあ果たし合いだ、いざ尋常に勝負！……と言えば聞こえはいいが、自分よりも格上にそれを求めることは、どれほど相手の誇りを貶めていることになるだろう。剣を握って三日の若造が、天下無双の劍豪に向かうほどの愚の骨頂だ。

妖夢が仕合いを申し入れ、勇儀は何時でも何処でも構わないと答えた。ならば、挑む側がそれ以上何を付け加えられるというのか。鬼とは、そうして戦いの中、自らの誇りを築いてきたものなのだから。

勇儀もまた、数多の裏切りや卑劣悪業も構わず飲み込んで、その言葉を枉げず、堂々正面から相対し打ち破ってきたのだから。

(器が、違うんだな……)

行住坐臥、常にもって強者であるとは、そういう事なのかもしれない。鮮烈なまでの鬼の生き方に、痛む頬をそつと擦りながら、妖夢はふと、そんなことを思った。

[M]

暗く湿った地の底にも、変わらず朝はやってくる。太陽を臨むことはできないこの地でも、どこからか薄明かりが差し、鬼火が薄れてゆくことで、妖怪達は自分たちの時間が終わることを知るのだ。

「さて」

河の畔で目を覚ました妖夢は、いつものように手早く干飯と梅漬の朝餉を済ませ、日課の型取り三千回を始めた。

まだ包帯の取れない身体は当然ながら本調子ではなく、動かしした手足には痛みを伴う。それに顔をしかめながらも、しかし妖夢は愚直に同じことを繰り返してゆく。

じっと横になって傷の治りを待っていると、身体はその姿勢に相応しい形に固まってしまふ。だから、少々痛んでも身体は動かしていたほうがいい、と。師にはそう教わっていた。

指折り数えるでもなく、日常になるまで馴染んでしまったことでの毎日。

「もうひと月になるのか……」

ふとした拍子に自分のいない白玉楼を思い描き、あれこれと気を揉んではみる妖夢だったが、基本的にはあれこれとそつなくこなす亡霊の姫は、案外庭師が居なくても変わらない日常を過ごしているのかもしれない。

あまり楽しくない想像が脳裏をよぎり、妖夢は雑念をふり払って型取りに集中する。

剣の道とは繰り返す。日々の修練、欠かさぬ鍛錬。ただひたすらに剣をふるい、それを飽きることなくひたすらに繰り返す。師より教わった技と心、その一つ一つを、自分自身の血肉へと変えるために。

己が身こそがひと振りの刀であるようにと、妖夢は忘我の中でそれに没頭してゆく。

斬ればわかる——

それが、師の教えの中でも一際深く妖夢の記憶に刻まれている言葉だった。先代の剣術指南役、魂魄妖忌は孫への数多くの教えの中に、ただの比喩としてそれを語ったに過ぎないのだから——妖夢にとってその言葉は何よりも強く心に残り、己の剣の根幹となっている。

もっとも、以前にその言葉の上っ面だけを真似て、手酷い目に遭ったこともある。思えばそれがあの騒がしき百万鬼夜行、伊吹萃香との出会いだった。

「……………ん？」

「一心不乱に素振りをしていた妖夢だが、ふと違和感を覚えて手を止める。」

「全身はすでに湯気を吐くほどに温まり、爪先までが汗に塗れていた。ほう、と吐いた息が雪の散る河原に真っ白く凝り、ほどなくして水音に溶け消えてゆく。」

「……ねえ」

汗をぬぐう妖夢の視線の先。いつの間にか橋の上には、欄干に背中あずけ、斜視をさらに険しくして爪を噛む橋姫の姿があった。

「いい加減、嫌にならないの？ 貴方。主人のわがままで、こんなことさせられてるんでしょ？」

「これまでよりもさらに強く。言葉にも態度にも、鋭い棘を込めるようにして、パルスィは妖夢を睨みつける。その視線にいつもと違う気配があることを悟り、妖夢は眉を潜める。」

「これまでもパルスィが呆れや軽蔑に近い感情を垣間見せる事はあったが、今日のそれは敵意と呼ばれるものに近い。」

「地の底に深く澱む、忌み嫌われた気配が、呪詛となつて橋の上を満たしてゆく。」

「全然解つてないようだからはつきり言つてあげる。貴方は馴染んでるつもりかも知れないけど、邪魔なの。鬱陶しいのよ。」

「……事情だかなんだか知らないけど、早く出て行つて欲しいの。貴方だって、こんなとこに居るのなんか嫌でしょ？」

「……ご自分の守る場所を、こんなところなんて言うのはどうかと思います。パルスィさん」

「は。お目出度い頭ね。半分しかないからかしら。私が好きでこんなところに居るとでも思つてるの？ 妬ましいわね」

土蜘蛛。橋姫。彼女達は共に、歴史の中で鬼と呼ばれた妖怪たちだ。

人間が「自分とは違う」ものを排斥することで生まれた妖怪。そんな彼等は、忘れられたものが流れ着く幻想郷においても、疎まれ怖れられ、地底へと追いやられた。旧地獄はそんな嫌われ者たちの集まりなのだ、かつてパルスィは妖夢に語ったことがあった。

「……いいわ。そんなに鈍いなら、きちんと思い知らせてあげてもいいのよ？ 私たちが何なのか」

呆れたように嘆息して、パルスィは陰鬱に呟いた。

ゆらり、と。橋の上に満ちた呪詛の気配が膨れ上がる。

パルスィの背後で、緑色の眼をした怪物がおもむろにその眼を見開いた。

—— 妬符「グリーンアイドモンスター」。

橋姫の執念を核に膨れ上がった緑眼の怪物は、低く唸り声をあげながら滑るように妖夢へと迫る。

その小柄な身体を噛み砕かんと、顎を開く緑眼の怪物の前に、妖夢は反射的に腰の刀へと手を伸ばし——

「——、」

ひたりと、白楼劍の柄尻を、抜刀はせぬままに怪物の鼻先へと突き付けていた。

「やめてください、パルスイさん」

気迫と視線だけで唸る緑眼の怪物を制し、その場へと押し留める。

「……なんのつもり？」

「私が命じられたのは、鬼を斬ることです。恩義ある人に刃は向けられません」

「恩義？ 憐れみの間違いじゃないの？」

嘲るようにパルスイは唇を歪める。しかし妖夢は静かに首を振った。

「……いえ。それに、こうしたやり方は好みませんから」

パルスイが何か言うよりも早く、妖夢は劍の柄から手を離し、待ち構える緑眼の怪物へと、自ら一步を踏み出した。

途端、緑の怪物は大きく顎を開いたまま、まるで霧散するように弾け、妖夢を傷つけぬまま消え失せてゆく。

スペルの意味を看破され、パルスイが息を飲む。

「——自惚れでなければ。パルスイさんは、私だって、鬼だ、と。そう言ってくださっているんですよ？」

「つ——!!」

その、橋姫の絶句が、全ての答えだった。

鬼を討って来いという主の命に背くものではないから。

勇儀の代わりに私を討てと。パルスイはそう言っているのだ。橋姫とは、橋が壊れぬよう橋脚の下に埋められた人柱でもある。

パルスイがことさらに捻くれた物言いをするのは、嫉妬心だけからではなく、自己犠牲がその内にあるからだと妖夢は思っていた。

「ば、馬つ鹿じゃないの!! お人好しにも程があるわ、貴方っ。あいつに勝てるわけないから、忠告してあげてるんじゃないのっ。それをっ——思いあがらないでよね、妬ましいっ!!」

誤魔化すように言葉を継いで、パルスイはぶいと妖夢に背を向けた。

……そう。パルスイは、決して勇儀の名前を口にしない。会話の上でそれがどれだけ不自然であつてもだ。

まさか知らない訳もないだろう。そうやって勇儀の名を呼ぶのを避けるということは、常から彼女の名について気を払っているのと同じことだ。聞いていてこれほど分かりやすいこともない。

嫉妬の橋姫という身において、それがどれだけ大切なことか。枕を並べる程度の事など、比べ物にもなるまい。色恋沙汰にはとんと鈍いと自他ともに認める妖夢でも、それくらいのことには

察することができた。

もつとも、当人はその自覚はないようだし、認めることなどもないだろうが。

(ひよつとしたら、私も——)

同じように。いつしか、あの、勇儀の人柄(?)に魅せられてしまっているのかもしれない。

そんなことを思い、妖夢は苦笑する。

二の句を次げぬままのパルスイの前に、妖夢は剣を下ろして、旧都の街を見上げた。空を覆う天蓋の下、ちらちらと白い雪が闇の中を舞ってゆく。

「鬼、というものがどうして疎まれなければならないかったのか。不思議に思います」

妖夢は、いつしか地底の妖怪たちに強い共感を覚えている自分に気付いていた。

パルスイも、ヤマメも、勇儀も——そして、地霊殿の主たちも。彼女たちは皆、自分たちが忌み嫌われる妖怪であることを、些かも恥じていない。

自分たち地上の者が、彼女達を前に、後ろ暗い想いを覚えたというのならば。それはかつての彼らを地下に追いやったことへの罪悪感に他ならないのだ。

人間が鬼を排斥したことで、彼等のそんな生き方が生まれたのだとしたら。半分だけの人の身とはいえ、その種としての責

は妖夢にもあるのかもしれない。

(……だから勝てない勝負でも悔しくない……のかな?)

自分の剣の師である祖父は、永らく漂泊の中に身を置いて、さまざまな戦いを経てきたという。

その弟子としての身の上ゆえか、白玉楼の剣術指南という肩書きで刀を握るゆえか。

かつて鬼と人が戦いを繰り広げた絵巻の時代の血が、鍛えられた剣の技や型という形で、妖夢にも受け継がれているのかもしれない。

「違うか。……自惚れだな。きつと」

負けた理由を探すならともかく、勝てない理由を探しては本末転倒だ。

またひとつ自分の未熟を知り、妖夢は修練を再開した。

【四】

さらさらと流れる川面が、地獄旧街道の明かりの中に揺れる。今日も旧都の入り口となる河の畔に妖夢はいた。河原に腰をおろし、いまいち慣れない座禪を組んで心を落ち着ける。

そもそも座禪というのは考えるためにするものではないのだが——このあたり、半分は雰囲気だ。剣はまずなんでもいいから、見様見真似ではじめることから一歩を歩む。

今ここに師は居らず、だから妖夢は全てを自分一人で学んでいかなければならない。たとえ手探りでも、前に進むには先を探らねばならなかった。

師から庭師の双剣を受け継いで以来、妖夢は努めてそう考えるようにしている。

思案することは一つ。

星熊勇儀に勝つためには、どうすればいいか、だ。

(鬼は、強い。……解ってるつもりだったけど)

言葉通り行住坐臥、いついかなる時も勇儀は妖夢の挑戦を真っ向受け止め、その圧倒的な実力でねじ伏せてきた。挑むたび

に彼私の力量、己の未熟を痛感させられるばかりだ。

(……勝てないのは、単純な理屈)

妖夢の持つ最強の剣、最速の剣、そのいずれもが勇儀には通じなかった。

最強の剣は、その威力を出そうとするため力み、隙を生じて、相手に防禦うけられてしまい、通じない。

最速の剣は、隙を与えずに打ち込むことこそできるが、その速さ故に威力が損なわれ、赤金黒金の鬼の肌を貫けない。

つまり、妖夢にはどうやっても鬼は斬れない、ということになってしまふ。

(これじゃあ手詰まりだ……)

理屈が単純な分、結論も単純だった。

だが、だからこそ。諦めることなく、妖夢はじつと思案を続ける。

勇儀は強い。桁外れに強い。中でもあの頑強さは、幻想郷でも群を抜いているだろう。なまかな手段では傷一つ付けることは叶わないかもしれない。妖夢があと十年、いや、五十年修煉を続けたところで、届くことはないだろう。

(——師匠なら、どうするのか)

己の足元を固めるために、妖夢はじつと心を凝らし、その問いを巡らせる。

確かに勇儀は極めて頑強な肉体を誇っている。鬼という種族

だけではなく、その中であつてさらに「力の」称号を名乗るほどにその膂力剛力には自信があるのだろう。

だが、本当に、今の自分では勇儀を傷つけることはできないのだろうか？ 妖夢は瞑目の中、深く思案を巡らせる。

川面の音だけが静かにあたりに満ち、時が静かに過ぎてゆく。

——どれほどの時間が過ぎただろう。没我の中、ふいに、一筋の光明が差した。

(……いや、違う。そうじゃない……！)

もし、妖夢の剣がなにひとつ勇儀に通じないのであれば、そもそも勇儀は、妖夢が何をしようとすべて構わず、相手にせずにいればいい。だが勇儀は、妖夢の剣を手や角、爪で一度ならず防御していた。

それはつまり、ただ棒立ちになつて刀を食らうわけにはいかないということであり、

(あの、防御された太刀筋ならば、鬼の身体でも、少なくとも身に受けることに躊躇が生じるんだ！)

逆説的に、それは勇儀を傷つける攻撃を、妖夢がこれまでも放つているということの意味している。

「……………」

浮かび上がったわずかな光明を前に、はやる心を抑え、妖夢は何度も繰り返された勇儀との手筋を慎重に思い返してゆく。ありつたけの集中力を振り絞り、今まさにこの場で勇儀と対峙

しているかのように、少女の身体に神経が張り詰める。

一手、二手、まるで詰将棋のように彼我の受け攻め、手筋を検討し、その全てを思い描いて、妖夢はやがて静かに確信した。

(……斬れる。斬れるんだ。私にも)

鬼は、嘘をつかない。だからこそあの戦いの中でも、勇儀はそれを偽らなかつたのだ。

(……でも、だからと言つてどうすればいいのか？ 理屈だけなら、ありつたけの力で、完全に無防備なところに切り込めばいいわけだけど……)

それで倒れなければ不死身か無敵だ。

確かに鬼はそのどちらでもない。それは彼等と人の歴史が証明している。

あの疎密を自在にする百万鬼夜行、伊吹葦香ですら、妖夢の剣で手足を斬り落とすことはできた(そしてそれは疎密を操るあの鬼にはまるで堪えた風でもなかつたが)。同じことが、勇儀にも言えるはずだった。

だが、それが可能だとしても、それは鬼を斬っているとは言えないだろう。岩や巻き藁を真っ二つにしているのとなにも変わらない。動けない相手を一刀両断したからと言つて、それがなんの証になろうというのか。

こうして考えてみると、かの雷公源頼光ですら、大江山の一戦で、伊吹童子と四天王に毒酒をたらふく飲ませて不意打ちを

しているわけで、鬼がそれを指して卑怯だといいたくなる理由もわかると言うものだろう。

『お前さんの、好きな時にかかって来な。』

「……………」

勇儀の振る舞いのひとつに答えを見たような気がして、妖夢は静かに吐息をこぼす。

あの日。初めて旅籠を訪れた時、拒むことなく妖夢の挑戦を受けた勇儀は、そもその事のはじめから、その事実に気付いてすらいなかった妖夢にまで、真摯に向き合ってくれていたことに他ならなかった。

(……勝ちたい)

胸の奥から、静かな闘志が湧きあがってくる。心のうちを震わせる強い想いに、妖夢は硬く拳を握りしめた。

たとえ、半分だけであろうと。鬼の真つ直ぐな想いに、人として向き合いたい。きっとそれが今の自分にすべき事だと、妖夢にはそう思えた。

そのためにも今、鬼を斬るための方策を見出さなければならぬだろう。妖夢は頭を振って再度、集中を高めてゆく。

今の妖夢の力量でも、鬼を傷つけることは不可能ではない。

それこそ手段を選ばなければ、勇儀を倒すことはできるはずだ。

しかし、それが真正面からとなつた時、勇儀としてそれを受け、あるいは躲してみせる。

(私の剣には、まだ無駄があるんだ。疾さを求めれば威力が。威力を求めれば疾さが損なわれる……)

それゆえの未熟。足りぬものがある故に、出来るはずのことが、出来ない。

しばし考えを巡らせ、妖夢はようやくそこに思い至る。

最速と、最威。そのいずれもこの身体が繰り出すことができず。だが、その両者を同時に成り立たせることができないのは——つまり。

(『私』が、邪魔なのか)

どちらもできるはずの自分が、二つを同時にできないということは、その両者を選び区別しているゆえだ。

己が『ある』ことよって、ひと振りの刀はいくつにも割れ、それによる無駄が生じている。

——斬れば、分かる。

刀は腕で振るうものではない。まして手首や脚や、身体で振るうものではない。なによりもまず、斬らんとする意気で振るうものだ。

斬るのは人だ。人の意志だ。刀が鞘に納まっているのは、斬

らんとする意志を封ずるため。ならば、意気さえあれば、相手を斬るのに、自分は要らない。

月が満ち欠けするように。波が寄せて返すように。花が開き散るように。

「意気より、発する刀」

——この身一つが、ひと振りの刃鋼はがね。

すう、と目を開き、妖夢は心のうちに浮かぶその答えを口に出した。

ただそこあり、ただそれを斬る。  
無念無想。

「……これだ」

辿り着いた静かな自信と共に、妖夢は深く頷いた。

〔五〕

妖夢が勇儀のもとを訪れたのは、それから数日を挟んだ夕刻のことであつた。

地底には太陽も月もないため、旧都に時刻を知らせるのは鐘の音と、燐光のように灯る鬼火だ。その陰気な青白い明かりに照らされて、街道沿いの店々が暖簾を上げ、街並みに賑わいが満ちてゆく。

旧都の繁華街、下落通り<sup>ゲラケ</sup>。髑髏の燭台に獸脂を燃やし、墓石のような黒御影石の門柱が罰当たり<sup>そと</sup>に聳える卒塔婆<sup>ぼしゆく</sup>宿は、旧都でも一、二を争う名店である。

不吉に墓場めいたその装いのどこが鬼の眼鏡にかなつたか、星熊勇儀はここ暫く、この宿の二階座敷を氣に入り、長々と逗留<sup>りゆう</sup>を続けていた。

賑やかに奏でる楽の音と、陽気に響く酒宴のざわめき。

酒に歌に踊りに、底抜けに陽気な地底の都が、けれど同時にどこか後ろ暗さを感じさせるのは、人から、そして同族からも忌み嫌われ、地下に放逐された彼等の怨嗟ゆえなのか。あるいは

は、かつて彼らを地の底に追いやった、地上に住む者たちの自責ゆえなのか。

そんな事を考えながら、宿の者に案内された妖夢は、勇儀の滞在する部屋へと通されていた。

「——あつはつは！ そうかい、じゃあいよいよお前さん達の大願も成就目前つてわけだ。目出度いね！ 鬼<sup>あま</sup>が仏門を祝うのも妙な具合だが」

「そうなの！ もう駄目かと思つてたけど、寅丸と連絡も付いたし、これで聖の復活も目前なのよ！ あとは飛宝を集めるだけで——」

「勇儀には何から何まで手伝つてもらつて。感謝してるわ。ごめんね、いつもぬえが迷惑かけてばかりで」

「氣にしなさんな。丁度いい退屈しのぎになるよ」

座敷の奥からは、知己らしき妖怪たちと話す勇儀の声も漏れ聞こえてきていた。以前、同じように宵の口に訪れた折には、間が悪く勇儀と橋姫との逢瀬に出くわして気まずい思いをしたものだが——今日はそんな事はないらしい。

折角の時間を妨げてしまう事に少し心苦しさを覚えつつも、妖夢は静かに襖を明け放ち、杯を傾けていた勇儀の前に進み出る。

「失礼します」

開け放たれた襖の向こうに妖夢の姿を認めた勇儀は、ああ、

と顔をほころばせた。ともに酒宴を囲んでいた水兵服や僧形の妖怪達も、揃って同じように振り向く。

「——ん、どうした、一杯付き合いに来たのかい？」

「いえ。……長らくお世話になりましたが、ようやく勝機が見つかりました。一手、お手合わせ願います」

妖夢はそう答え、静かに背の太刀へと手をかけた。



妖怪達の悲鳴と怒号が上がる中、轟音とともに、卒塔婆宿の二階ががくんと斜めにずれ落ちてゆく。

真ふたつに断ち割られる屋根の中から、勇儀は近くの屋根へと飛び移り、がちんと屋根瓦を踏みしめた。背中を丸め、膝に手を載せて、時ならぬ騒ぎに騒然となる旧地獄街道を、まるで人ごとのように見下ろして唸る。

「おー、派手にまあやるねえ」

「遠慮は無用、と伺っていますので。……参ります」

「勇儀を追って屋根に上がった妖夢は、短く告げると屋根瓦を蹴立って勇儀の元へと疾る。

「決心が付いたんなら、確かに遠慮はいらんかね!!」

対する勇儀もまた叫び、その身に斬撃を浴びるのにも構わず、振り上げた拳を足元へと叩きつけた。

天より降る流星のごとき一撃が、屋根を砕き、建物を貫通して、二階建ての宿をべしやんに叩き潰す。

間一髪難を逃れた妖怪達が逃げ惑う中、乱れ飛ぶ楔弾があちこちを踏みつぶしてゆく。

「どっちが派手なんだか……」

倒壊から逃れるため飛びのいた妖夢は呆れたように小さく呟き、迎撃に弾幕を展開した。剣閃に沿って並び飛ぶ楔弾の戦列が勇儀の弾幕と激突、相殺して消滅する。

旧き地獄街道を跨ぐように、交差する二色の弾幕が、地底の闇に相殺の閃光を走らせる。

ほの暗き地底を煌々と照らす閃光と、そこかしこで響く破裂音。五感を乱す弾幕の中、勇儀は油断なく真横に生じた気配に反応する。

「っは、不意打ちとは甘く見られたもんだ!!」

腰をひねって繰り出された剛拳はしかし、空を切り、その先にあつた妖夢の半身をつるんとすり抜けた。

同時、餅のように形を変えた半身は、勇儀の拳を包み込むように変じてからめ取る。

「!?!」

「もらったッ!!」

その時にはすでに、妖夢は勇儀の眼前にまで迫っていた。地を蹴り体重を乗せた飛び蹴りで、もう一方の勇儀の腕を蹴り飛ばし、無防備になった勇儀の懐に飛び込んで、逆袈裟に楼観剣を斬り上げる。

顎を打ち抜くその一撃は、鬼とて無視のできない致命の攻撃であつた。

が、なんと勇儀は大きく口を開け、牙ではなくとその剣尖を噛み止めたのだ。

「惜しいね」

べ、と口に咥えた楼観剣の刃先を吐き捨てた勇儀は、凶暴に唇を歪ませた。

首の力だけで、庭師の小柄な身体を投げ飛ばし。半身の拘束を力任せに引きちぎって、勇儀は追撃とばかりに妖夢に迫る。

妖夢はそれを見据え、懐から呪符スベルカードを引き抜く。

「——魂魄『幽明求聞持聡明の法』!!」

目にも止まらぬ速さで宙を飛んだ半身が、瞬間で妖夢のもとへと舞い戻り、どろん、と煙とともに小さな爆発を起こす。

その白い煙を蹴り出すようにそこから飛び出したのは、二人の魂魄妖夢だった。

分け身や囀、錯視ではなく、そのいずれもが真贋なく、共に同じ白玉楼の庭師である。半人半霊の半霊部分を、呪符スベルカードによつ

て人型へと変じさせたものだ。

二人の妖夢は、揃いの姿で二振りの楼観剣を構え、左右から、上下から、同時に勇儀へと斬りかかった。

「おうっ!?」

これまで見せずにいた奥の手の一つだ。さしもの勇儀も面喰つたか、わずかに動きが澁む。

左右から交叉する鋼の流星が鬼を狙い打ち、その両手と打ち合わされた。

「まだまだ!」

さらに閃く白楼剣の剣閃がそこに加わった。左右に上下が加わり、蹴足体捌きまでも交えて、前後までもが塞がれてゆく。

都合四振りの刃が、勇儀を二重三重に取り囲んだ。

「……つと。ふうむ。二刀流で足りなきや四刀流かい？」

悪かあない。けどね。半人前が倍になった程度じゃ、せいぜいが二半人前だ。一人前にやまだ足りないね」

だが、この猛攻を前になお四天王の一角は揺るがない。

一旦慌てるそぶりは見せたものの、右の手のひら、左の肘、牙、——さらに、ふるった角先で。妖夢が同時に繰り出した四つの剣尖を、勇儀はがきりと受け止めてみせた。

手甲や爪で撃ち落とすのではなく、拵げた手指で斬撃を『掴み取る』。およそ常軌を逸した手筋は、勇儀の並々ならぬ技量を知らせるものといえた。

「……今更、兎戯こじも手に付き合はされるのは御免だよ」

凶暴な笑みと共に、勇儀は思い切り胸を反らせ、大きく息を吸い込んだ。その巨軀にすら納まり切らぬ怪力乱神が、鬼の身のうちに膨れ上がる。刹那、

轟、と地底を響かせて。勇儀の咆声が天蓋の底を叩きつけた。破滅の咆哮があらゆるものを打ち砕いて、刃向う者を徹底的に蹂躪する。

—— 鬼声「壊滅の咆哮」。

全方位を撃ち据える咆声が、街道の周囲を無差別に、辺り構わずなぎ倒す。見物に集まってきた妖怪達が吹き飛ばされ、旧都のそこそこで悲鳴が上がる。

スperlブレイクの白煙と共に、ふたりの妖夢うちの片方は、始まりと同じように煙を立てて半身の姿へと戻り、ひるひると旧地獄街道の屋根上へと飛んでゆく。

地底を揺るがす轟音の中、たまらず耳を塞いだ庭師を見上げ、勇儀は獣のような笑みを覗かせた。

「さて、次の出し物はなんだい？ 曲芸かい、手品かい？ 余裕があるのも結構だがね、お遊戯ばっかりじゃあ—— 退屈だよ」  
「ッ……」

言葉の最後を気魄にして、勇儀はみりりと拳を握る。暴虐なまでに膨れ上がる鬼の気配に撃ち抜かれ、妖夢の身体が軋みを

上げる。

つう、と滴る冷たい汗が、妖夢の顎を流れ落ちる。  
「……これでお仕舞いなら、ちいと、残念だったねえ」  
まるで、諦め。

吐き捨てるような、低いその一言と共に、勇儀は全てを打ち砕く拳を振りかぶった。

これまで何度か、勝負に敗北を刻んできた致命の一撃に、思わず少女の足が竦み、悲鳴が喉奥に膨れあがる。

（——退くな!!）

その恐れを噛み千切るように妖夢は確と前を見据え、奥歯をきつく噛み締めた。

（勇儀さんの、パルスイさんの心意気を、裏切るな!!）

震える脚を、思い切りその場に踏みしめて。妖夢は己を叱咤し、深く鋭く前へ踏み込んだ。

両手で握り締めた楼観剣を、真つ向振り下ろす。瓦を叩き壊して斬り込んだ四尺三寸の切っ先が、がきりと勇儀の爪に食い込んだ。

「っふッ、」

ひゅうと肚に吸い込んだ息を、練り込むように溜め込んで。妖夢の身体は下がることなく、更に前へと出た。一步に五回の

割合で剣を重ね、勇儀の胸元へと斬り込んでゆく。

「つぐ、!?」

庭師の気配が変わったことに、勇儀も気付いただろう。呼吸をせずに立て続けに打ち込まれる切っ先が、剛力を誇る鬼の腕を圧倒してゆく。

「おおおおおおおッ!!」

肚の底から気合いを吐いて。妖夢の速度がさらに上がる。一步に五回の割合で放たれていた斬撃が十回になり、十五を数え、二十を超える。

これまで距離をとっては駿足頼りに斬りかかるばかりだった庭師の剣は、脚を止め、真っ向真正面から、息つく暇もなく斬り込む剛剣へと姿を変えていた。

(人が、鬼と語るのは、闘いの中でこそだ!!)

己が身ひとつを、一振りの刀にして。

白玉楼の双剣は、銀のきらめきを残して地を奔る。

「ああああああああア!!」

顔を狙って打ち込まれる勇儀の剛拳を、抜き放った白楼剣が受け止める。剣気に乗せた切っ先はそのまま鋭い軌跡を飛ばし、交叉した勇儀の腕を弾きあげた。

無防備になった勇儀の上半身めがけ、妖夢の楼観剣が、すい

と地を滑る。

「つち、」

低い軌道から真上に跳ねあがった大太刀を、勇儀は先程同様、脚の蹴爪で弾こうとする。

——が。鬼の右脇を逆袈裟に斬り割らんとしていた四尺三寸の刃は、その寸前でさらに軌道を変えた。

「ああああああ!!」

龍がその身を翻すかの如く。勇儀の目前で大きく跳ねた妖夢は、己の半身を足場に、宙空でさらに跳躍の向きを変え、頭上から勇儀を襲う。

楼観剣を両逆手に握り変えての、天地逆の斬り落とし。見上げるほどの巨軀を持つ鬼の脳天めがけ、妖夢は全体重を乗せた両逆手の刃を斬り込んでゆく。

絶妙の間合いで撃ち込まれた兜割りの一撃は、勇儀の角の根元を、強烈に打ち据える。

「くあッ」

持ち前の鬼の頑強さゆえ、断ち割られることはなかったが、その痛みは久しく勇儀が感じたことのないものだった。

「こいつ、は——」

まるで——まるで、同じ鬼に一撃食らったかのような、強烈な衝撃。骨にまで染み入る激痛と、それ以上に言い様のない衝動が、勇儀の胸を打っていた。



とめどなく、終わりなく、いつまでも。

地の底に棲む、ひとりの鬼は——

「泣き喚いても容赦してやらんから、覚悟しなっ!!」  
心の底から、笑っていた。



時ならぬ大騒ぎに、旧都の市街には何事かと駆け付けた妖怪達が溢れ、派手に剣を交わし弾幕を打ち合う二人の大立ち回りを見物する者たちが出始めていた。

「そこで、この大勝負の白黒をめぐる賭けも始まる。」

人垣の中、勇儀と斬り合う妖夢の姿を見上げ、水橋パルスィは苛立ちを覚えながら爪を噛む。

「何やってるのよ……」

あれだけ何度も言っただのに、懲りる様子もなく鬼に挑む馬鹿正直な庭師の少女。

もう、関わるのは止めにしようと決めたはずなのに、なぜかその姿をパルスィは追ってしまう。

「心配かい？」

ふいに脇からの声にはたと顔を上げれば、そこに土蜘蛛、黒

谷ヤマメの姿があった。

胸元にはおっかなびつくり顔を覗かせている釣瓶落としのキスメを抱え、土蜘蛛はパルスィの隣へと並ぶ。

「……何？」

殊更に不機嫌なパルスィの視線に、キスメは身を竦ませて、桶の中に引っ込んでしまう。そんな彼女をよしよしとなだめつつ、ヤマメは人懐こい笑顔を覗かせた。

「橋にだーれも居ないから、どうしたのかと思ってたけど。やっぱりパルスィも見に来てたんだねえ」

「あんたこそ、なんでここに居るのよ」

病毒を操るヤマメは、地底に繋がる大穴の入り口近くを棲家にして、人混みが出る事を避けながら暮らしているはずだ。キスメにしても似たようなもので、この場に居ることにとやかく言われる筋合いはない。

パルスィがちくりと語尾に棘を交えてそう問えば、ヤマメはあつけらんかと、

「そりゃあ、こんなお祭り騒ぎは久々だからさ。見逃がしちゃう損だよ」

「あのね……」

言いかけたパルスィは、ヤマメの表情に口をつぐむ。街道を揺るがし、打ち鳴らされる戦の火花を見上げ、ヤマメはそっと目を細めていたのだ。

「だつてさ。あんなに真つ向から鬼と戦つてくれる相手なんて、もう長らくここにやいなかつたらう？ ……まったくもつ、楽しくてしょうがないさ。そう思わないかい、パルスイ」



轟音と輝きが、雪散る旧都の空に響く。

「そおら！」

鬼の手元でじゃらりと鎖が揺れ、光線の檻が妖夢を逃げ場なく包み込む。地を穿ち空を裂き、交叉する赤青の光の帯は上下左右の安地を削り、妖夢の足をその場へと縫い止める。

そこへ狙い済ましたように放たれる、白く輝く光弾。

妖夢はそこまでを見て取ると、腰からもう一方の短刀、白楼剣を抜き打った。眼前に刃鏡をかざし、光線の中へと身を躍らせる。

磨き抜かれた迷いを断つ刃は、一点の曇りなく輝いて、鬼の放つ閃光を受け止めていた。

「おおっと？」

これは流石に予想の外か。跳ね返った己の光線に脇腹を打たれ、さしもの勇儀も声を上げた。その隙をついて乱れた光線の

檻から抜けた妖夢は、勇儀の懐へと一跳びに迫り、裂帛の気合と共に双剣を振るう。

がきりと噛み合う剣と爪、鬼と人は近付いては離れ、剣を刃を打ち合わせ、旧都の空に雪を散らす。

「はあ、つ……」

荒い息、火照る身体。顎先から滴る汗もそのままに、妖夢は静かに、勇儀を見た。

その口元にもいつしか、緩やかな笑みがある。

戦いにわくわくと胸を躍らせる自分がいることを、妖夢は今日初めて知った。

「……ありがとうございます。勇儀さん。ここに来てから、自分の未熟を思い知らされることばかりです」

「そいつは結構。……正直ね、お前さんがここまで粘るとは思わなかったよ」

ちらりと、と。街道にひしめく群衆の中に、橋姫の姿を見、勇儀は軽く肩をすくめた。

「ったく、妙な仏心出すもんじゃないねえ。このまま退治されたら、あたしの大事なモンまで全部持つてかれちまいそくだ」

「……はい？」

いまいち解つていない様子の妖夢に、勇儀は苦笑。

「気にしなさんな。ただの愚痴さ。……んじゃあ、景気良く暖まったところで、そろそろ千秋楽と行こうか!!」

「だん、と地を蹴った勇儀は、握った拳を高々と天へかち上げ、地底を揺るがさんばかりの大音声を上げる。

「天よ地よ、乱れに乱れよ語れに語れ、この名を聞いて怖れるがいい!! 人の咎にて悪鬼羅刹と誹られようが、鬼の正道に横道なし!!」

「我こそは三千世界に比類無き、剛力無双、妖怪の山が四天王、怪力乱神、力の勇儀!!」

「いざや腕に覚えのある者は、名乗りを上げよ参られいッ!! 地獄の鬼の慰みに素つ首引いて並べてやろう!!」

「高らかな鬼の一咆哮に、地底はなお激しく震えた。

「地底の天蓋に亀裂が走る中、勇儀ははしん! と拳を手のひらに打ち付ける。

「どうした、人間。臆したかい!!」

「……成程。そういう趣向ならば」

「妖夢は頷くと、刀を鞘に納め、眼前に不敵に笑う鬼をきつと睨みつけた。

「怪力乱神大いに結構。人を恐れ地の底へと逃げ隠れた鬼が、猛勇を語るとは笑止千万!! しかし鬼よ見損なうな!! 道半ばなれど、冥界は白玉楼を守るこの双剣——お前の怪力乱神程度、相手するには十二分だっ!!」

「我が名は西行寺家劍術指南役、魂魄妖夢!! 師より受け継ぎ、二百由旬の庭にて磨いたこの双剣にて、見事その首、討ち取つ

てくれる!!」

「勇儀にこたえる形で妖夢の名乗りが、静かな地底に響き渡った。勇儀は満足そうに牙を覗かせ、しつかと両の拳を握り締める。

——そして、ざわつく見物の中から、不意に音が響いた。

「陽気な、歓声のような、軽やかに響く笛の音。それに鼓、太鼓に三味線、さらには手拍子までも加わった。いくつもの音が重なって、軽快なリズムを奏で始める。

「騒然とざわつくだけだった雑踏の音が、いつしか二人への声援へと変わっていた。

「負けるなと妖夢を励ます声。

「叩き潰せと勇儀を叱咤する声。

「街道に集った妖怪達の声が、次々と重なり、轟くように地底中に響いてゆく。

「なんだい。これじゃすつかり悪役じゃないか」

「……ありがとうございます」

「礼にや及ばんよ。あたしも大概、腑抜けちまっていたのがわかったからね。派手にぶん殴られて思い出したよ」

「額をさすり、勇儀はわずかに微笑んだ。

「よおし、と呟いて、旧地獄街道の鬼は、思い切り吸い込んだ息をありつたけ声に変えてさらに叫ぶ。

「さあ、見物してる連中、聞こえるかい!! あたしとこいつと、

どっちが勝っても祝勝会だ!! 全員残らず潰れるまで、呑んで呑んで呑みまくるよッ!!

……そら、返事はどうしたあッ!!」

威勢のいい勇儀の啖呵に、

一拍置いて、旧街道を揺るがすひとときわ大きな歓声が轟く。

重なる声は、歓喜に満ち、熱狂の渦のように地底に響いてゆく。鬼と人と、遙か昔より繰り返された力試しが、妖怪たちの騒ぎ奏でる楽の音に囃し立てられる。

いくつもの声に背中を押され、二人は再び向かい合う。  
「どうしたい。膝が笑ってるじゃないか」

「武者震いです」

「……ッは、言うねえ。いいさ、来なッ!!」

鬼と剣士は、どちらからともなく笑みを浮かべ、

同時に地を蹴った。



飛び散る火花、轟く閃光。唸る爆音。奏でられる祭囃子。

次々打ち上がる火花のごとく、旧地獄街道には祭の音が響い

ていた。

旧都の賑わいを離れ、さらに地下へと奥深く。荘厳なステンドグラスに彩られた妖館の一室では、赤毛を二つ編みにした猫耳の少女が、地底の空に舞い散る閃光を見あげている。

隣には同じように、黒髪の少女がぼかんと口を開けて窓に張り付いていた。

「ほえー……」

「綺麗ですねえ、さとりさま」

目をまんまるしてに輝かせ、夢中になっている霊鳥路うづら空の隣で、火焰猫燐は主人のほうを見やる。

ペットに促され、古明地さとりは椅子を立った。

感情の薄い瞳をどこか眠たげに細めながら、ゆつくりと窓の傍まで歩み寄ると、旧都の空を彩る閃光を見上げる。

雪の空に散る輝きは、巫女や魔法使い達が侵入してきた時のものに良く似ていた。

「……そうね」

綺麗ね、と小さく呟いて、さとりは空の頭をそつと撫でる。

「わあー……」

ガラスにべたりと額をくつつけて、お空はすっかりその彩りに夢中だった。そのうち私も混ざると言い出しそうな様子の彼女をさりげなく捕まえながら、燐はさとりに尋ねる。

「良かったんですか、見に行かなくて？」

「あんなに強い感情が溢れ返っている中じゃ、頭がどうにかな

つてしまいわ」

痛む額をそつと押さえ、地霊殿の主はわずかに苦笑した。

それに、と咳いて窓の外を見上げる。

「ここでも、こんなにはつきり聞こえるくらいなもの」



閃光、並ぶ弾幕。打ち合わされる刃。

砕ける大地、とどろく轟音。

果てるともなく続く、鬼と人との戦いは、ますます激しさを増していた。妖夢も勇儀も、お互い至る所傷だらけで、汗と血と埃に塗れている。けれど二人の表情は、一点の曇りもなく晴れやかだ。

「さあて、まったくもつて楽しくてしようがないけど、そろそろ仕舞いにしようじゃないか!!」

「……ええ、同感です」

同時に頷き、二人は叫び交わして対峙する。互いに何枚と切り合った切り札スルカードは、もはやわずか数枚を残すのみ。

「——光鬼『金剛螺旋』ッ!!」

「——空観剣『六根清浄斬』!!」

勇儀が硬く握り込み、掲げた拳から、鬼力漲る不壊の螺旋が、竜巻の如く溢れ出した。荒れ狂う輝きが地殻を削り、地底の中を見境なく無差別に薙ぎ払う。

渦巻く光の螺旋は、天地を構わず抉り穿ち波打ち、ついでに地獄旧街道の街並みの一部までも巻き込んで、雪崩を打って押し寄せる。

鬼とは笑う嵐であり、酒を飲む災禍である。ただの剣士に、自然に抗うすべはない。

なれど妖夢は揺るがぬ意志のまま、叩き付けられる破壊の渦に立ち向かう。

土砂の嵐を伴う金剛螺旋のわずかな間隙を見据え、楼観剣を腰溜めに、崩れ来る閃光へと身体ごとぶつかっていった。

刹那の間に閃く七十二の太刀筋をもって、金剛の螺旋を一步も退かずに迎え撃つ。

「ここ、だッ!!」

雪崩寄せる土砂の最も脆い部分に突き立てた四尺あまりの太刀の切っ先が、光の螺旋弾幕の先に、確かに開いた空間を捉える。

妖夢は、躊躇せずその奥へと無理矢理に身体をねじ込んだ。砕かれた光の破片が肩を打ち、腿をえぐる。

が——苦痛を感じる身体を置き去りに、妖夢は土埃をたなびかせて、その向こうの鬼へとさらに一步を刻んでいた。

「おおおおおおおッ」

雄叫びと共に、勇儀の元へと迫る妖夢を、しかし鬼は盤石の姿で笑みと共に待ち構える。

「——四天王奥義」

それは、山の四天王、星熊勇儀が、最も得意とする一撃。ぎり、と弓を射るように振り被られた拳が、高らかな叫びとともに構えられる。

剛力無双、怪力乱神の一撃にてわずか三步で死を刻む、必殺の拳。不壞なる金剛すらその余興とする、勇儀の力。

「……『三步、必殺』ッッ!!」

ずずん、と一步。地を揺るがし踏み込まれた一足と共に、まだ放たれてもいないはずの一撃が、気魄となつて妖夢を打ち据えた。

間を置かず、深く二歩目。その強烈無比な威力と共に、数多の武人を地に伏せてきた業力が轟く。

その真正面で、妖夢はしかし静かに、鞘に納めた楼観劍の柄に手をかけていた。

「……」

迫る必殺の拳を意識すらせずに。風に揺れる梢のごとく、波打つ水面のごとく。ただ——あるがまま。

(……彼女を斬るのに、私は邪魔だ)

だから、その結果さえあればいい。そこに己は不要。

技量も業前もすべて不要。

無念、無想。

そこに在る、というそれだけが、斬る、という結果を生む。ただ、極々、自然に。

日々繰り返し、重ね、飽きることなく愚直に続け、続け、続けた型へ。

——流れるように、意気を発する。

「——ッ!!」

鬼の、致死の一撃が放たれ、届くよりもお速く。

舞った刹那の剣閃は、音よりも、あるいは光りよりも疾く、さん、と静かに旧地獄街道を一足で駆け抜ける。

——劍伎「桜花閃々」。

美しく、目を奪うかのような無駄のない太刀捌きは、華の咲き乱れるかのように流麗に。

はるか技量の高みを超えて。妖夢の劍は、勇儀の角先を二寸ばかり、見事に断ち割っていた。

からん、と地を跳ねる角が、決着の合図。

一瞬遅れての、歓声に——

地底は大きく震えた。

〔六〕

「いやあ、心底参ったよ。大したもんだ!!」

再建進む旧都宿場の二階座敷で、勇儀は豪快に笑い、ぐいと酒を呷る。約束の宴会場には、大一番の勝負を繰り広げた二人をねぎらい、湛えようと詰めかけた地底中の妖怪たちでごった返していた。囃し立てる声に合わせ、ヤマメとキスメが自慢のどを披露し、歓声を浴びている。

卓の上には肉に魚にと贅を尽くした料理が山と積まれ、次々と一角鬼の胃袋へと納まっていく。

「はあ……恐れ入ります」

「そこで遠慮してどうするのか、もつと誇りな妖夢。勝つた方が縮こまってちゃ、あたしも負けた甲斐がないってもんだ」

がつがつと猪の串焼きを三口でたいたらげ、再度勇儀は愉快そうに笑う。

座敷で向かい合う勇儀と妖夢は、どちらも負けず劣らずの満身創痍。包帯に添え木に膏薬に、どこを見ても怪我のない場所などない。

妖夢も、顔の腫れは幾分引いているものの、実のところ口の中までずたずたで、料理の味も解らないほどだった。

旧都での決着から丸三日、お互いに寝込んでいたことから、あの激闘の凄まじさが分かるというものだろう。

「そんな事より飲みな、せつかくこうして差し向かえるんだ。楽しく行こうじゃないか」

ぐいつ、と大きな紅杯を呷った勇儀だったが、病みあがりにも鬼の強すぎる酒精は刺激が強すぎたか、直後にこぼれほと派手にむせて俯く。

数度咳を繰り返して、畜生染みるねえ、と強がりながら口元をぬぐう勇儀の隣で、パルスィは甲斐甲斐しくも眉を吊り上げていた。

「ああもう、そんなにこぼして……ねえ。怪我してるんですよ。少しは見栄張るのやめたらどうなの?」

「ん? 何言つてんだパルスィ。怪我してんだから食わなきゃ治らないじゃないか」

勇儀はいつもの羽織の下、吊った右手を添え木ごとぶらぶらと振ってみせる

見事に折れた腕の骨や、深々と唇に入った刀傷は見ているだけでも痛くてたまらないのだが、パルスィの忠告もどこ吹く風と、勇儀は構わずにがつがつと酒宴の料理を食らう。

幽々子も健啖家では有名であるが、鬼はそもそもその桁が違

うようだった。

「そんなに心配なら、お前さんが食べさせてくれるのかい？」

「つなッ……」

「ははあ、怒った顔も可愛いねえ」

「ッ何言ってるの、何言ってるのッ!？」

大事なことなので二回叫びながら、ぼつ、と顔を赤くする。ハルスイ。

ああ、平和だなあ、と思いつつ妖夢も盃に口をつける。

もともとあまり酒は嗜む方ではないが、今日ばかりはこの騒がしさに心地よく酔えそうな気がした。

「……はあ。騒々しく大変結構。本日はお日柄もよく、ご決着おめでとございます、とでも言えればいいんでしょうか」

不意に脇からの声。見れば、不景気な顔をした地霊殿の主が共のペットを引き連れてやってきたところだった。

「なんださとり、あんだも来てたのかい」

「『珍しいこともあるもんだ』……ですか。あれだけ派手に暴れ回っておいで良く言いますね。壊すだけ壊して、後で直せばいいで済まされても困ります」

勇儀をちらりと見、さとりは吐息と共に妖夢へと向き直った。半眼に引き下ろした瞳で、彼女はまじまじと妖夢の顔を覗きこんでくる。

「……本当は、色々と言いたいこともあつたんですが。止めに

しましょう。何を言っても無料なようです」

「へえ。こりゃ驚いた」

「『雨でも降るかね』……ですか。私もそれくらいの分別はありますよ。……部外者が何を言うよりも、お二人ともはつきりと語り合っているようですからね」

嘆息と共に目を瞑るさとり。すつかり出来上がった様子空と隣が、妖怪たちと共に騒ぎ始めていた。

暑いねえ、と呟いた勇儀は、後ろの窓を開け放った。

雪舞い賑わう旧都の街並みが、熱のこもった座敷に冷えた心地よい風を運んでくる。

一月余りの滞在で、すつかり馴染んだ街並みを見下ろし、妖夢も感慨と共に眼を閉じる。

「……さて」

杯の上に舞い降る雪の結晶をすくい、勇儀は妖夢の隣に腰を下ろした。

「折角こうやって一緒に酒も飲めるようになったつてのに、もう帰っちゃうつてのがつくづく勿体ないねえ。

……なあ妖夢。こつちに居着く気はないかい？ 飲み食いくらいは不自由はさせないよ？」

「つて、ちよつと!? 何言いだすの、いきなりっ」

叫ぶハルスイだが、勇儀はすつかりその気ようだ。あれだけ殴り合った相手にも構わず、人懐っこい笑顔で無邪気に言っ

てくる彼女に、妖夢は思わず口元をほころばせる。

——しかし。

「ええ。折角のお誘いは有り難いですが——私には、役目があ  
りますので」

す、と隣の刀に手を添えて、妖夢は静かに笑みを納め勇儀に  
こたえる。さり気なく視線を横にやれば、目を尖らせてじろつ  
とこちらを睨む橋姫と視線があつた。

「鬼退治の相手が、これ以上の長居はお邪魔でしょう」

「っは、そうかい」

振られちまつたねえ、とぼやいて杯を口にした勇儀の脇腹に、  
膨れっ面のパルスイがどすつ、と鋭く肘鉄を入れる。

遠慮も会釈もない一撃だったが、頑強な鬼の身体にはさした  
る影響もなかったらしく、勇儀は『ん？』と眉をひそめて周り  
を見回すばかり。

パルスイはほんのりと紅い顔を反らして、小さく『妬ましい  
わ』と呟くのだった。



「——しかし、本当にそんなものでいいのかい？」

妖夢の前に置かれた、縮緬の風呂敷包み——斬り落とされた  
己の角を示し、勇儀は言う。

「鬼退治の証にしちやいささ寂しくないかい？ 折角掴んだ  
意気だろう。なんなら腕の一本も落としていきやいいじゃない  
か。あたしはいちいち追いかけて取り返そうなんて性質の悪い  
趣味はないよ？」

「……ねえ、嫌味？ 嫌味なの？」

二の腕を叩いて示してみせる勇儀の隣で、パルスイが露骨に  
嫌な顔をする。橋姫には、斬り落とされた腕を一条橋で取り戻  
そうとした故事があるだけに、妖夢は何と答えたものか曖昧に  
表情を浮かべるしかない。

ちなみに、斬り落とされた勇儀の角は、すでに半ばほどまで  
新しいものが生えかけていた。どうやらしばらくすれば元に戻  
るらしい。

角と言えば鬼の誇りのようなもののはずだが、そんな筈のよ  
うな抜いでいいのだろうか、妖夢は内心疑問で仕方がなかつ  
たのだが——他の誰も突っ込まないところを見るに、そういう  
ものようだ。

「なんなら、行きがけの駄賃にもうひと勝負したっていいさ。  
どうだい？」

「いえ、その……その事なんです」

できることならば有耶無耶にしておきたかったことなのだが、

こうまではずきりと訊かれてしまえばもう誤魔化せない。妖夢はいよいよ覚悟を決めて、これまで黙っていた理由を話すことにした。

「気恥ずかしさに思わず視線が落ち、俯いた頬が紅潮する。」

「——げっ!?」

「うわあ汚っ!?」

「だ、大丈夫ですかさとり様っ!?」

突如、遠くからこちらを見ていたさとりが、口元を押さえて咳き込み始めた。うろたえたベット達が主の身体を抱えて走り回る中、妖夢は眉を寄せながら、もごもごと口の中で呟いた。

「……その、無念無想は良かったんですが……。真剣勝負だというのに、どうも、こんな時まで庭の剪定（つもの）が抜けなかったようで……」

「……あん?」

「あの、つまり。一番目に付いたところを、そのまま切り落としてしまった、と言いますか……」

「……………」

「……………」

妖夢の言葉に一度は呆気にとられたパルスィと勇儀は顔を合わせ、それから同時に吹き出した。

「……っは、あっはっはっはっは!! そうかい、そりゃあ……」

まあ、難儀だったねえ!」

「大変申し訳ありませんっ!」

がばと伏して頭を下げる妖夢に、勇儀は目もとに涙すら浮かべ、足を投げ出して腹を抱える。

「つくつく、いいねえ、これまでさんざ剣の相手はしてきたけど、植木扱いは初めてだよ!!」

ふいと顔をそらせたパルスィも、良く見れば肩を細かく震わせている。

見れば背中を向けたさとりも、おろおろするベット達に囲まれながら、いまだ遠くで蹲っていた。どちらも間違ひなく笑うのを堪えているのだろう。

なんとも締まらない最後のオチとともに。

座敷に響く楽の音は、いつまでも陽気に、かつての地獄街道を賑わせていた。

(了)

## 【第二版あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

銅おりはと申します。このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『魂魄妖夢鬼退治・第二版』は、昨年の幽明樓で頒布しました本の改訂版となります。地底へと赴いた半人半霊の庭師が、その修練を通じて鬼と人のあり方をあれこれ思索するお話です。

ひたむきに剣の道を歩んでいこうとする妖夢の魅力、『旧地獄街道をゆく』『華のさかづき大江山』に代表される旧都の賑やかさ。そして地底に残ることを選んだ妖怪達の信条と想い。そんな登場人物たちの魅力が、少しでも伝えられていけばと思います。

初版を書いた時にはまだ茨歌仙が始まっていなかったこともありまして、勇儀の過去には随分妄想が含まれています。

萃香・勇儀が大江山の酒呑童子とその四天王本人であるところから始まり、大江山で四天王として活躍していた時代、萃香と恋仲だった茨木童子に勇儀も懸想していたとか、勇儀は最終的に萃香に遠慮して身を引いてしまったとか、以来勇儀は自分の心についた嘘を許せず己に愚直なまでに正道を貫くことを課しているとか、幻想郷ができた時に茨木童子だけは外の世界に残り、萃香はそれを追って幻想郷を離れたとか、パルスイは自分と同じ神話的バックボーンを持つ橋姫として、いまでも勇儀の心の中に残っているであろう茨木童子に遠慮しつつも嫉妬して、その事に自己嫌悪しているとか。

そんな感じであれこれと設定をしたのも懐かしいです。いまでは原作との乖離も激しいですが、これもまた二次創作の味と言うことで。

さて、そろそろ紙幅も尽きてまいりました。拙い部分は多々ありますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。

再版・改訂に当たりましては設定考証等で白身氏、Riz a氏にはお世話になりました。この場を借りて感謝いたします。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

## 【奥付】

「魂魄妖夢鬼退治・第二版」

平成23年5月4日 幽明樓に

発行 折葉坂三番地（おひざかさんばんち）  
[\(http://onihazakablog28.fc2.com/\)](http://onihazakablog28.fc2.com/)  
著者 銅（かね）おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方Project」の二次創作です。





魂魄妖夢鬼退治第二版 白玉楼之庭師地底赴事

平成廿三年

五月四日 二版



発行 折葉坂三番地

<http://oruhazaka.blog28.fc2.com/>